









哥林雜木抄目錄

雜

眺

法歌廿四号

述懷

法歌九十八号

懷旧

并昔往事  
法歌四十八号

離別

法歌八号

旅

并羈法歌百一十号

旅泊

法歌六号

海路

法歌二号

夢

法歌廿二号

無常

法歌十二号

神祇

并社法歌  
廿五号

釋教

法歌十六号

祝

法歌廿号





歌林新木抄

雜

○ 眺望

[illegible]



次海をさる千枚 船はく堤におきまはせし屋より入沖乃船舟急玄法  
 船よりあつ船舟 船の浦と松の葉にう流れ船よりあつ船舟急玄法  
 彼とてさへ 船の浦と松の葉にう流れ船よりあつ船舟急玄法  
 松浦河 船の浦と松の葉にう流れ船よりあつ船舟急玄法  
 友代のも坂 船の浦と松の葉にう流れ船よりあつ船舟急玄法  
 三保の松系 船の浦と松の葉にう流れ船よりあつ船舟急玄法  
 うれ初海 船の浦と松の葉にう流れ船よりあつ船舟急玄法  
 じさう地 船の浦と松の葉にう流れ船よりあつ船舟急玄法  
 あつ一の浦 船の浦と松の葉にう流れ船よりあつ船舟急玄法  
 あつ一の浦 船の浦と松の葉にう流れ船よりあつ船舟急玄法  
 志ののう 船の浦と松の葉にう流れ船よりあつ船舟急玄法  
 あつ一の浦 船の浦と松の葉にう流れ船よりあつ船舟急玄法  
 三保の仲付 船の浦と松の葉にう流れ船よりあつ船舟急玄法

明屋の仲 船の浦と松の葉にう流れ船よりあつ船舟急玄法  
 と海 船の浦と松の葉にう流れ船よりあつ船舟急玄法  
 あつ一の浦 船の浦と松の葉にう流れ船よりあつ船舟急玄法  
 船の浦と松の葉にう流れ船よりあつ船舟急玄法  
 あつ一の浦 船の浦と松の葉にう流れ船よりあつ船舟急玄法  
 三保の松系 船の浦と松の葉にう流れ船よりあつ船舟急玄法  
 船の浦と松の葉にう流れ船よりあつ船舟急玄法  
 うれ初海 船の浦と松の葉にう流れ船よりあつ船舟急玄法  
 じさう地 船の浦と松の葉にう流れ船よりあつ船舟急玄法  
 あつ一の浦 船の浦と松の葉にう流れ船よりあつ船舟急玄法  
 あつ一の浦 船の浦と松の葉にう流れ船よりあつ船舟急玄法  
 志ののう 船の浦と松の葉にう流れ船よりあつ船舟急玄法  
 あつ一の浦 船の浦と松の葉にう流れ船よりあつ船舟急玄法  
 三保の仲付 船の浦と松の葉にう流れ船よりあつ船舟急玄法



第<sup>れ</sup>言乃中切ハ安<sup>レ</sup>ル月<sup>レ</sup>終<sup>ル</sup>コト<sup>ハ</sup>未<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>所<sup>ニ</sup> 道<sup>ニ</sup>後

この月の支分額が、山崎のより社中へ  
後物

同  
かうきんじの炭乃いと松乃いと堅乃  
炭乃

下  
月  
冬  
平  
定  
明  
山  
を  
と  
ゆ  
わ  
つ  
ひ  
雪  
を  
降  
う  
て  
政  
務

やんぢ乃末のいふ唐先やうふけの染師急

一人の義に就ては後世にかりとゞまらるる成の由を 隆祐翁

り来とていふをうとてとていふの系宗統

さとう又さとうやめいじのやまの原ふかた  
作義

ちふさのしるしをうけとて六烟をいぬ海京笑ひ家

と浦乃たふふといふ程波の聲の靡乃鳴の空を底

雲井より藤二葉よりつや川上下亭浪の舟 作者

此の系八重の改洛とせむはるるをうくは  
 次泉溪  
 あそびを

佐江乃松のまゝと寝てゐたら乃ほよくゝ舟人 作是

三つやゆふ舟の彼方ちとゆふ舟のち然  
 宝歌

日新社  
まの浦や志々々つれあて入目移を相成 家隆心

夕々まゝれそあれ位者の浦よりそのおらに

ありしに諸の自取なりとて、  
道は愛

位者、氣の元候村の原松を乞ふ。其六を乞ふ也。此は

ひそかに

十市子夕きまじくふるのふしをうれつ 俊成

なまやうつゝふふのまそ彼よりて様をたえ

此の原漕等とれ久々の新まつふけつ百回  
 教養

終極のりやせうをねんけん<sup>しん</sup>  
王基

立られど今の月とてさうな夜はなほ川の舟に  
 乗る舟の帆をさうとさうと

新編  
うのまゆもくもくはなつはなつ  
永

澤村康  
子











奇の秋述懐 千秋 ちかちかやうやうとくははせつる秋なりては仲正  
 奇の雲述懐 秋集 ちかちか又もつれいふ乃のれいふよりくハハ秋  
 奇の雨述懐 千秋 ちかちか又もつれいふ乃のれいふよりくハハ秋  
 奇の方述懐 秋集 ちかちか又もつれいふ乃のれいふよりくハハ秋  
 奇の雲述懐 千秋 ちかちか又もつれいふ乃のれいふよりくハハ秋  
 奇の煙述懐 千秋 ちかちか又もつれいふ乃のれいふよりくハハ秋  
 奇の述懐 千秋 ちかちか又もつれいふ乃のれいふよりくハハ秋  
 秋述懐 千秋 ちかちか又もつれいふ乃のれいふよりくハハ秋  
 威暮述懐 千秋 ちかちか又もつれいふ乃のれいふよりくハハ秋  
 寛述懐 千秋 ちかちか又もつれいふ乃のれいふよりくハハ秋  
 奇の夕述懐 千秋 ちかちか又もつれいふ乃のれいふよりくハハ秋  
 奇の暮述懐 千秋 ちかちか又もつれいふ乃のれいふよりくハハ秋

秋述懐 千秋 ちかちか又もつれいふ乃のれいふよりくハハ秋  
 奇の木述懐 千秋 ちかちか又もつれいふ乃のれいふよりくハハ秋  
 奇の草述懐 千秋 ちかちか又もつれいふ乃のれいふよりくハハ秋  
 奇の松述懐 千秋 ちかちか又もつれいふ乃のれいふよりくハハ秋  
 奇の草述懐 千秋 ちかちか又もつれいふ乃のれいふよりくハハ秋  
 奇の草述懐 千秋 ちかちか又もつれいふ乃のれいふよりくハハ秋  
 奇の竹述懐 千秋 ちかちか又もつれいふ乃のれいふよりくハハ秋  
 奇の鳥述懐 千秋 ちかちか又もつれいふ乃のれいふよりくハハ秋  
 奇の虫述懐 千秋 ちかちか又もつれいふ乃のれいふよりくハハ秋  
 奇の山述懐 千秋 ちかちか又もつれいふ乃のれいふよりくハハ秋  
 奇の松述懐 千秋 ちかちか又もつれいふ乃のれいふよりくハハ秋  
 浮田杜述懐 千秋 ちかちか又もつれいふ乃のれいふよりくハハ秋  
 奇の安述懐 千秋 ちかちか又もつれいふ乃のれいふよりくハハ秋



れ  
くこのやうに作らるゝものにてゝゝつる類のけも極べ  
たものなるべし

千尋法師の物語  
おとしとてつとて人もあらず  
おとしのなほは定 常雅

独のゝ家やうあんのふたうの橋ハ誰も毎  
 有衆

我乃為方川の落首清きなれども

くろくをまゝの流のこり糞と著しう由は交渉  
千々

後撰  
ふくまふくまを物格の六之は有るを在  
五

うさぎを沈め、又其の根を食ふ。 為 信 下

[illegible]

その安かきうき候うに、  
又、  
千々

此の海は又之をいふを最良とす  
 虎集

卷之五

17  
 八十八  
 八十八

ふくもこれ海にまじりて新にたふすやうな

是れは  
養子も孝子  
居の流もた  
るなりと  
傳ふ初め  
和歌集  
門下女

秋  
 日  
 の  
 光  
 や  
 夕  
 光  
 を  
 我  
 る  
 心  
 の  
 光  
 照  
 せ  
 給  
 へ

名なりきりの人我れをいふにもなきなり 民安

後橋系後  
 子子ひくまもあふみくろく

月  
述懐人の心よりて是れなりんをうへし  
成家

辛酉年十月廿五日  
庚子年十一月十五日

衆集

山名 杉野 之 人 名 山 口 氏  
山名 杉野 之 人 名 山 口 氏  
山名 杉野 之 人 名 山 口 氏

玉紫

家集  
卷之四  
七

多めはひとふきても言限あれと言つてそのやられぬ心

其のいふも知人必く其世なり

述懐  
二子







日  
くちてもふいへくをきうじどうありこのきの日

「うそめんがらもさうなふれぬめり知れとの入おのれ」

下  
 家よりありとていふと牧かひとて知る  
 日

のむらうのよ近うあるの河川とて人のこゝに 道冬彦

家集 困懷の心とちみても難くみよるをいふ  
ふかきとわくこころをいふも成しつゝ  
ふかきとわくこころをいふも成しつゝ

衣あうき神まうに候やうれぬのいさの庵 為夜

世中よりや歌の外に我も字も人なども世に

今をこの愛でふわ有えそけふ中風と歌  
 雲白な

わのれとるの内を平すとの最の有るわ  
後

持てて移入するのを祈り候て

波のほとりてきふくうとよせいふくうきき  
 去来はむてふくうとよせいふくうきき

曰  
 うゑと今八款一  
 從學於此  
 爲此  
 爲此  
 爲此

家集  
これぞ穠乳ひねのまき下りきひ波てりや人の氣張

親  
 倭と衣のそなうつろきとあひそつ  
 多由

愛嬌乃たそそふ影ありとて浦守の鶴の如  
後北条氏

付首

玉榮  
日下  
此乃世之又一月日方院

後松  
つるを代々の青とひ移の候つる鳥のねもり  
つるを代々の青とひ移の候つる鳥のねもり  
つるを代々の青とひ移の候つる鳥のねもり

新後撰  
何とく  
骨もよく  
あはれ  
は方  
は同  
序  
世  
氏  
須  
念  
念

續後飛  
石とて  
世といふ  
事と我とも  
今ハ方の中  
に  
抱負  
象

強古  
つゝこの首の流々々々世と爲る所なり  
強古  
つゝこの首の流々々々世と爲る所なり  
強古  
つゝこの首の流々々々世と爲る所なり

新橋のふりりふりり収まるをさる青々りり

新於愛のといふ愛のといふ  
愛のといふ月日のつらさ  
と云ふ者とは又云ふ  
日

後松  
 分て年什とてええんよりうふくの要い、故秀賢



















いふ衣

浦分衣

これぬまをさ

あささ

ねま乃あ

毒の冠

旅祿の母冠

雲あさ

あささ旅祿

日くじり

さやさ

旅衣

日あさ

彩後祿 彩後祿の母冠は、やうていせいのあまねやまに、三位歌資

お祭 夕衣のうか衣、あささのほのさう、お祭 祿まされひく、お祭

お祭 雲あさのうか衣、あささのほのさう、お祭 祿まされひく、お祭

お祭 雲あさのうか衣、あささのほのさう、お祭 祿まされひく、お祭

お祭 雲あさのうか衣、あささのほのさう、お祭 祿まされひく、お祭

お祭 雲あさのうか衣、あささのほのさう、お祭 祿まされひく、お祭

お祭 雲あさのうか衣、あささのほのさう、お祭 祿まされひく、お祭

お祭 雲あさのうか衣、あささのほのさう、お祭 祿まされひく、お祭

お祭 雲あさのうか衣、あささのほのさう、お祭 祿まされひく、お祭

お祭 雲あさのうか衣、あささのほのさう、お祭 祿まされひく、お祭

お祭 雲あさのうか衣、あささのほのさう、お祭 祿まされひく、お祭

さうやど

あさ衣

雲の衣祿

いふの衣祿

いふの衣祿

いふの衣祿

雲の衣祿

雲の衣祿

雲の衣祿

いふの衣祿

いふの衣祿

いふの衣祿

いふの衣祿

彩後祿 彩後祿の母冠は、やうていせいのあまねやまに、三位歌資

お祭 夕衣のうか衣、あささのほのさう、お祭 祿まされひく、お祭

お祭 雲あさのうか衣、あささのほのさう、お祭 祿まされひく、お祭

お祭 雲あさのうか衣、あささのほのさう、お祭 祿まされひく、お祭

お祭 雲あさのうか衣、あささのほのさう、お祭 祿まされひく、お祭

お祭 雲あさのうか衣、あささのほのさう、お祭 祿まされひく、お祭

お祭 雲あさのうか衣、あささのほのさう、お祭 祿まされひく、お祭

お祭 雲あさのうか衣、あささのほのさう、お祭 祿まされひく、お祭

お祭 雲あさのうか衣、あささのほのさう、お祭 祿まされひく、お祭

お祭 雲あさのうか衣、あささのほのさう、お祭 祿まされひく、お祭

お祭 雲あさのうか衣、あささのほのさう、お祭 祿まされひく、お祭

お祭 雲あさのうか衣、あささのほのさう、お祭 祿まされひく、お祭

お祭 雲あさのうか衣、あささのほのさう、お祭 祿まされひく、お祭



いよく旅ね休む旅の憂は明かりなき夜うとて改題

同  
知とて一巻乃夢を恨じか又松を枕にのぞき  
後松を後

二村の室内をくまなく廻りけりて

如くおぼくにてお後の言をおくをいふ  
 お舟の  
 有也

定ふまゝ新しき物なるを衣と云ふは、  
 定むるに

あなうつはふとさくのうら枕ふとせのそよふた

月も我やとれやとれ夢の何の世に抱ふ人 道玄

宗乃摩訶之愛てひとや福かんふ身山有家

中より萩の茶と片あててさうん旅来て文後名

方々之のちのちをたふす神五月そとぬ  
長島新

右子世之れとと朝あふふ公家枯竹 源亨和

位程今之亦多之熱也之之切公之賜之速矣

ふ室の使のまをまふふ一あな旅の言の灯の

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf of a book. The paper has a slightly grainy texture and shows signs of wear, including a prominent vertical crease down the center and a dark, irregular stain running vertically along the right edge. The overall color is a warm, off-white or light beige.

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf of a book. The paper has a slightly textured appearance with some minor discoloration and a small tear near the bottom left corner. A faint, dark smudge is visible near the bottom center. The binding edge on the left is visible.

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf of a book. The paper has a slightly textured appearance with some minor discoloration and small dark spots, possibly due to age or handling. There is a small tear or hole near the top edge of the page. The page is otherwise empty of any text or markings.

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf of a book. The paper has a slightly textured appearance with some minor discoloration or foxing. A dark vertical crease or fold line runs down the center of the page. There is no text or other markings on the page.

なまらハ長路

天さうひかひさうに漕れん明のとき大和

神女やその涙おきてふいねやと人言ふに涙は

魏以人公道祖祔乃定也子孫之爲公卒又爲之

あつたさうおなまうていふの神子但てその

志のちの比きつるかろく

清水三々人

吾れは三歳の本祭よりあて枕のしよと我を忠

夢之さるにふくまひていふふくまふ

之故也。元無其意。人遂以爲之。

思はるに子よりや花は只よのなきを  
兼

あまをさるひるの荒れ子独松我のふた下候也

あまのやのむすめをさすはるゝと云ふ西

いふは、  
の禪を  
の禪を  
の禪を



飯と 推のいより 万 歳とあれけより飯とて枕蓆よりあれ推のなり 有る手

ふれいふ 金あつてさういふ

ふびふ 室のきつていふいふ言と人さうせんさうかりなり 堀川太夫

ふりけれ いくくのちゆさうれ休むん推のいせさ娘のれ飯 仁実

ふくふ 國うさうい歳とてさういふ多くの民さういふなり 後義

白雲のやど 夜集雲よりいふなり

定路路り 世といふとさういふなり

大和 定路路りをさういふなり

田路 定路路りをさういふなり

信 定路路りをさういふなり

のきまが時 定路路りをさういふなり

十秋 定路路りをさういふなり

十秋 定路路りをさういふなり

十秋 定路路りをさういふなり

十秋 定路路りをさういふなり

十秋 定路路りをさういふなり

十秋 定路路りをさういふなり

十秋 定路路りをさういふなり

十秋 定路路りをさういふなり

十秋 定路路りをさういふなり

十秋 定路路りをさういふなり

十秋 定路路りをさういふなり

十秋 定路路りをさういふなり

十秋 定路路りをさういふなり

十秋 定路路りをさういふなり



三保の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

三保の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原

伊勢の松原















野外旅宿

秋葉の枕を明くし神をよめるは旅のつらき思ひ

水辺旅宿

磯の石を踏みし水音を聞くは旅のつらき思ひ

旅宿の声

水音を聞くは旅のつらき思ひ

海辺旅宿

海音を聞くは旅のつらき思ひ

旅宿の声

水音を聞くは旅のつらき思ひ

田舎旅宿

田舎の静けさを聞くは旅のつらき思ひ

旅宿の声

水音を聞くは旅のつらき思ひ

旅宿の声

水音を聞くは旅のつらき思ひ

旅宿の声

水音を聞くは旅のつらき思ひ

旅宿の声

水音を聞くは旅のつらき思ひ

羈旅秋

秋の旅のつらき思ひ

羈旅野

野の静けさを聞くは旅のつらき思ひ

羈旅松

松の静けさを聞くは旅のつらき思ひ

羈中送日

日を送るは旅のつらき思ひ

羈中友

友を思ふは旅のつらき思ひ

羈中穴

穴の静けさを聞くは旅のつらき思ひ

羈中松凡

松の静けさを聞くは旅のつらき思ひ

羈中凡吟

吟を聞くは旅のつらき思ひ

羈中穴凡

穴の静けさを聞くは旅のつらき思ひ

羈中呪

呪を聞くは旅のつらき思ひ

羈中呪思

思を聞くは旅のつらき思ひ



羈中嘆元

羈中鈴

羈中昼

羈中暮日

羈中嘆元

羈中夕

羈中夕

羈中夜

羈中春

羈中夜

羈中冬

羈中烟

羈中嘆元 東集 山崎家乃くともけそひてふの奥より宿の 後夜  
 羈中鈴 十 おもひたるやうやうらんらん 鈴の神の音 昨夜  
 羈中昼 日 おもひたる本流は弱とて 夜半つらん日さけぬ  
 羈中暮日 日 本よりつたひく夕方の夜もかきあす 暮の中山 家集  
 羈中嘆元 日 つくさくといふ夜とて 夜半も夕方の夜の家 家集  
 羈中夕 日 松とていふ山の草は 夕の山ゆくと 松の山 夕  
 羈中夕 日 松とていふ山の草は 夕の山ゆくと 松の山 夕  
 羈中夜 日 松とていふ山の草は 夕の山ゆくと 松の山 夕  
 羈中春 日 松とていふ山の草は 夕の山ゆくと 松の山 夕  
 羈中夜 日 松とていふ山の草は 夕の山ゆくと 松の山 夕  
 羈中冬 日 松とていふ山の草は 夕の山ゆくと 松の山 夕  
 羈中烟 日 松とていふ山の草は 夕の山ゆくと 松の山 夕

羈中山

羈中山路

羈中夜

羈中野

羈中冥

羈中途を

羈中橋

羈中河

羈中溪

羈中溪

羈中憶却

羈中山 後夜 山崎家乃くともけそひてふの奥より宿の 後夜  
 羈中山路 日 おもひたるやうやうらんらん 鈴の神の音 昨夜  
 羈中夜 日 おもひたる本流は弱とて 夜半つらん日さけぬ  
 羈中野 日 本よりつたひく夕方の夜もかきあす 暮の中山 家集  
 羈中冥 日 つくさくといふ夜とて 夜半も夕方の夜の家 家集  
 羈中途を 日 松とていふ山の草は 夕の山ゆくと 松の山 夕  
 羈中橋 日 松とていふ山の草は 夕の山ゆくと 松の山 夕  
 羈中河 日 松とていふ山の草は 夕の山ゆくと 松の山 夕  
 羈中溪 日 松とていふ山の草は 夕の山ゆくと 松の山 夕  
 羈中溪 日 松とていふ山の草は 夕の山ゆくと 松の山 夕  
 羈中憶却 日 松とていふ山の草は 夕の山ゆくと 松の山 夕



佐々木  
うさぎ  
千人

人かた乃いあまの表は波そらるる

右字よりおれ小嶋よりなる由を云ふるを云ふも  
耕を

今  
ふひふをきく人知所を垣干城のたよて 爲氏  
急六七五

うさ枕なまのゆり分れも月一都まうふ愛  
千原

事は於省れふやんその後とそく旅人耕之

いとちる雲あきまふれも夕そとひの宿を  
遠りてなごの女とあふ

襖にてたの友とて  
 くらと枕やとる月ふそ病かなり 如乃人の親 後章

多岐にわたる心より衣ひそく諸の事休後

まゝとて粧ひ定本もあつて又知今世に世道

枕いとしをてと寝よ衣にと幾ふも  
為冬

神の心を人々を導く事よふの母を天

右軍のよしの文をそとあなまの宿の灯道参る

新  
 久も又ふたふとてその座方入社のね 後宇  
 家集

不二の将王ひとひて立烟弱りとくゑる定も就  
毎心者

考ふべきものとして分るゝが人々も皆さう  
 考へてゐるから衣神の如くはなにも分るゝ

をさうり起と立てし衣衾をさうりか  
かき出せばさうり起と立てし衣衾をさうりか  
かき出せばさうり起と立てし衣衾をさうりか

秋のくれり時々の声もさきよふ秋の猿人  
 永陽

目叔と云ふてガイも公と云ふありてとせる山居おろろ

<sup>新</sup>  
 高きよりふくらみゆくを  
 人旅のよみの書  
少大佐  
文政

秋低

松浦之くふふく浮く神もあつても彼方のく降

うゑと枕なまのゆりなれども月一やこゝ通ふ爰か 九太奇

おとこ  
玉葉  
今も昔の頃の如く枕ひきも寝たうにぬを有家  
ふりて月さる力有り毎家つよこま交ありやと為家

乃人々乃々乃の派り毎家三つは倭女やと西秀  
 世定



しとの浦

とひうて、おそろ衣室をよびつゝみゆきをひくの浦を  
待愛の後

志

此遠近所入倭之自落の之物也  
作



舟あつてもかきのもつたるうさ枕愛流も汲まえて  
 浪風よからちうかうと花をうひそくいのな舟儀と  
 文七  
 夫木  
 浦さひと表なるおの泊くれ松風さへ千巻鳴く  
 立甲いそしくれて大伴のこ乃泊は母やうらん  
 近にならうとの泊と行きてふれていあんとはそふ  
 夫木  
 彼ささる竹乃泊のとてあ貝蛸さ世ふも逢ふに  
 明ぬより室の泊り乃追凡は梅さういつる母人  
 名号  
 そろそろは鴨乃おすそえずあかれわかの泊は露やびん  
 波凡の月させんと秋の書と秋ありのうさふの定歌  
 千代  
 あれぐみのよわれうさこの泊はに夜浮ねとて  
 家集  
 はうの泊とすなめあといひもやられおと社之  
 千代  
 ああこれ毎海いつこそう泊けし東の名ともそと  
 正三位  
 久米

[illegible]

浪乃さうわ  
漕別建ち  
波路の舟

浪乃こころ  
 漕別建む  
 波路の舟  
 八重の波  
 知ぬ波  
 浪ぞと  
 舟人  
 友舟  
 浪ぞと  
 波乃舟  
 已上  
 波乃舟  
 漕別建む  
 波路の舟  
 八重の波  
 知ぬ波  
 浪ぞと  
 舟人  
 友舟  
 浪ぞと  
 波乃舟



夜集  
こころ川の舟とあふきて夕日あはく川の舟 慈法  
玉葉  
こころもあふ玉けけしとそ秋のふゆれ 崇徳

隆

之

牛乳

玉染

抄本

古今

位

福

會

之

18

1

100

之芳

命

人

5

卷之五

1200

上

後者

為

大石

加久下

卷之八

...

類



家集

親

家

家

丈木

四

新

九

五代

文

午立

うゝ世の愛・愛の世・せゝよの愛  
心子及他方

竺子及他方

卷之七

同

福林

類

千

月

曰

同

乾

張

執

家

新

新千  
幾  
松の穴く  
盛也

為世

佳入佳

年



凡破曉爰

浪声驚爰

草居野爰

墨冷爰驚

爰談故人

世路如爰

あきと爰深山かりにぞくわが心はのちまうぬ 後主親

あきとこゝろのそとにわづらひれつたはのちまうぬ 後主親

あきと爰とこゝろのそとにわづらひれつたはのちまうぬ 後主親

あきとこゝろのそとにわづらひれつたはのちまうぬ 後主親

あきとこゝろのそとにわづらひれつたはのちまうぬ 後主親

あきとこゝろのそとにわづらひれつたはのちまうぬ 後主親

あきとこゝろのそとにわづらひれつたはのちまうぬ 後主親

あきとこゝろのそとにわづらひれつたはのちまうぬ 後主親

あきとこゝろのそとにわづらひれつたはのちまうぬ 後主親

あきとこゝろのそとにわづらひれつたはのちまうぬ 後主親

○無常

曉眠易覺

老眼易覺

嘆文復爰

あきと世

あきと世

あきと世

あきと世

あきと世

あきと世

あきと世

あきと世

あきと世

あきと世

あきと世

あきと世

あきとこゝろのそとにわづらひれつたはのちまうぬ 後主親

あきとこゝろのそとにわづらひれつたはのちまうぬ 後主親

あきとこゝろのそとにわづらひれつたはのちまうぬ 後主親

あきとこゝろのそとにわづらひれつたはのちまうぬ 後主親

あきとこゝろのそとにわづらひれつたはのちまうぬ 後主親

あきとこゝろのそとにわづらひれつたはのちまうぬ 後主親

あきとこゝろのそとにわづらひれつたはのちまうぬ 後主親

あきとこゝろのそとにわづらひれつたはのちまうぬ 後主親

あきとこゝろのそとにわづらひれつたはのちまうぬ 後主親

あきとこゝろのそとにわづらひれつたはのちまうぬ 後主親

あきとこゝろのそとにわづらひれつたはのちまうぬ 後主親

あきとこゝろのそとにわづらひれつたはのちまうぬ 後主親

あきとこゝろのそとにわづらひれつたはのちまうぬ 後主親



ゆるぎなく

ふの火



有催無常

世の凡そ

致中先生

寄家望老

朝觀亭

清暮觀

方地無方

水望者

火字

老後望

何顏望

方以安

○神祇并社

あまのこ

つ  
し  
し

かき

Weyland

卷之三

少長祿

德

...

三子

ふねのやうに

三

卷之六



とよまの 千五百  
くまをひ  
さうじとよまの神をひきまふ神のさうじ  
初陽つ辰

位者のあ  
と木

位<sup>月</sup>うのあし神はちひても忘るゝをうんとそまて日

社  
 西暦一九一一年  
 新

くそぞの  
凡そくそぞの内外も極度  
度考

定戸の首  
天照玉神天の定戸はよりちとくひりし  
定戸の首

下は定根の  
定根といふとくうとくうと稱し其の陰虚より生

此方の定ぬのんて下と天とを辨せしつゝハ云々を述  
 べし又下の定ぬとありて是は又ハ此方の定ぬ

万代もまたとてあまの海より定根の志と波の色 森隆

祿さうくひえの社のゆさすなまのききとてふは後醍醐

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf of a book. The paper has a slightly textured appearance with some faint smudges and a dark vertical line along the right edge, possibly indicating the binding or a fold. There is no text or other markings on the page.

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf from an old book. The paper has a slightly textured appearance with some minor discoloration and a small dark stain near the bottom center. A vertical crease or fold line is visible running down the middle of the page.

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf of a book. The paper has a slightly textured appearance with some minor discoloration and a vertical crease down the center. A small, faint blue mark is visible near the top right corner.

祢のまゝ  
柳葉はゆつてくそ作せ祢のまゝ寝の顔

日 豊神と  
 豊神のまゝに豊神のまゝに豊神

上之智人々 皇太神靈

五言古詩  
神志  
人

二月の初申がねを善い家とよむところなる位類

日  
 ちのの柳筆と云ふ字を引く

一、佐々木 方吉のいふと、や 方吉の

やうく光  
新石  
やうく光を焼くやうに  
この芝は、家でもよく  
生える

ちうに交々光烈  
 和光に塵のふり  
 未のふり塵のふり  
 ちうに交々光烈  
 和光に塵のふり  
 未のふり塵のふり

非の意人  
白川七郎  
明子とわたくしと子やう非の意人世と非ん 馬を食た

志方の門  
やうふ張られそや志方の門は松万松松風を吹流す所は

竹簡



北師乃一書也

ありては、富の社の天つ神を、五社論もろろ、おん下基

ちやうち神の恵のいろあはれういあうそふまは 基良に

らやふれのもむろのくす研考程の序もあはれ  
 檢病室  
 佐々  
 公使後傳抄

八百万方の神をあらわす所の原をいふ 神念  
 契をいふところ 明神 又 御神 といふ お下

あまの守祇のまゝにふらふ波の八百をまぐす(守)  
石清水さうにたれと語ひてもか代りる祇のし女子 稚光  
ちやうとむら乃焼くそかと為りてこれ初ん 忠俊

[illegible]

依てれり人の世のそとに世と名けの處より、道は後  
 依てれり人の世のそとに世と名けの處より、道は後

神風や卯ののちのち桂子や春をく内代ものころを衣高下

柱とてくもる  
 万代の今も人々  
 雲霧の  
 大

つゝそ世とあるに依るに之方や一乃神の心を  
 目とせ社の神に  
 宗親王  
 又助  
 後  
 宗親王  
 又助

[illegible]

久保乃天より授けしは神の度を知る誠  
伊賀あきく



くりつたさきやう心の境はそ天てる祢の氣也とる 大納言

夫を以て移すをくもてされ毎の愛ありや 権六初之

天付社といひてそより其所の奥迄有り後宇多院

安永  
榎のふたの煙を吹立ててむうううと祈るこの祈は空を

天照大神定戸より十戸くひの六戸天照大神定戸より  
天照大神定戸より十戸くひの六戸天照大神定戸より

子  
變  
あ  
る  
市  
の  
ま  
は  
と  
す  
た  
方  
光  
乃  
ゆ  
は  
我  
と  
り  
い  
か  
昨  
急

何々や天々うりや子くの社も徳と衆人  
三光  
三才  
三才

聖賢の徳を慕ふは、  
其國

新  
うそまふてつるゆゑあひと云まはるへ  
位者の

之已ハ内柄ノミナリトテ律トモナリ  
五九

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf from an old book. The paper has a slightly textured appearance with some minor discoloration and a dark, irregular vertical stain running down the right side. A small, light-colored mark is visible near the top left corner.

卷之四

卷之八

月  
 及の入物の子等より長なることありて下等にもあり

計多るやとみよふは榎等のとみよふと重なり  
 此の如く

壬辰年九月廿三日  
乙卯年九月廿三日

[illegible]

いふと立ちあがりて天の所柱に見ゆれば代々よりこころ

どのうに神らの宮の方之下とてまゝに天のよりうに遷<sup>ニ</sup>座<sup>ル</sup>  
 子立<sup>ニ</sup>言<sup>フ</sup>

神代やもてて我川のいとしきえりきとやとて娘乃人恋ひ

まゝ  
とてんふも  
たれか  
ふら  
まの  
社  
い  
を  
就  
成  
る  
法  
作

日邪と云し  
三つて二つありし時と云けり我々のさうだ

天竺の香を  
喜りなまなり

神を平ていの鹿の夏毛もあやうにいづ天の我を

新と汁翁とを合し、字に云ひしを以て、  
又洗神、なほふてひそとて、柏葉を以て飯菜と云

七



五のつと

五のつと 夫木 万代のまゝもあはれ金極まはれつゝまのつとに後れ

八万あひの社

八万あひの社 日 伊勢の社とて五社とつとつとりのみ社

やその法社

やその法社 日 伊勢の社とて五社とつとつとりのみ社

しもの社

しもの社 日 伊勢の社とて五社とつとつとりのみ社

社やつと

社やつと 日 伊勢の社とて五社とつとつとりのみ社

いせとの宮

いせとの宮 夫木 伊勢の社とて五社とつとつとりのみ社

本の前庭の

本の前庭の 夫木 伊勢の社とて五社とつとつとりのみ社

やとち乃

やとち乃 夫木 伊勢の社とて五社とつとつとりのみ社

くしつ

くしつ 夫木 伊勢の社とて五社とつとつとりのみ社

このつと

このつと 夫木 伊勢の社とて五社とつとつとりのみ社

もろの

もろの 夫木 伊勢の社とて五社とつとつとりのみ社

やうつ

やうつ 夫木 伊勢の社とて五社とつとつとりのみ社

りうや

りうや 夫木 伊勢の社とて五社とつとつとりのみ社

もろの

もろの 夫木 伊勢の社とて五社とつとつとりのみ社

はつち

はつち 夫木 伊勢の社とて五社とつとつとりのみ社

り路の

り路の 夫木 伊勢の社とて五社とつとつとりのみ社

つちの

つちの 夫木 伊勢の社とて五社とつとつとりのみ社

を屋敷の

を屋敷の 夫木 伊勢の社とて五社とつとつとりのみ社

さねつ

さねつ 夫木 伊勢の社とて五社とつとつとりのみ社

社の人

社の人 夫木 伊勢の社とて五社とつとつとりのみ社

社あそび

社あそび 夫木 伊勢の社とて五社とつとつとりのみ社

ちの四人

ちの四人 夫木 伊勢の社とて五社とつとつとりのみ社

いふ社紙の初社書とて初とある方も多うとて一社可考



已上不及

かえ  
いふあれは路のいとさき月ありぬえの世と原水作え

新  
くろなまきふた代と照正に祐隆の字を  
在知院

[illegible]

日  
まゝにそめくきぬのよりなる病也忘  
日

善日せといふる人の程も解るゝものかと思ふと

新千  
天のとも  
昔より一死して  
神代より正氣の  
声 伏見後

神乃つと成す方之を乃初めとひく

さくらのうねとあまてゑと子年と初はつ作しやく 師し急きふ

玉桂を盤の邊に我々の所を引寄せた。月

新にきくふくじの松とつけ文仲川堤名曰

此を志すは校の名よりして義世ある神の垣曰

三痛乃山松系乃枕或子也子神子子四子子五子

公月  
久うお光とそよぶ海りのりよりと祢も援也 曰

九字と天照神乃勢と云ふと鏡のまゝなりし  
おた食

祇  
抹  
爪  
龍  
と  
な  
て  
う  
ら  
ま  
さ  
に  
  
か  
の  
こ  
ろ  
を  
書  
き  
て  
く  
る  
は  
神  
も  
う  
た  
ん  
源

大徳寺の引合書云く我初と云を辨もさるるべし

神より授けられた川のそのまゝに祈りゑしむはの白き子

うゝふやまてふん吹まひふれんのわいくとまゝに

天々この世の世は平々

皇の光にあま神もあはるのちといふさむらん

なるを神 父のきりしんをあらわすのてを

ちひみちいゝあともいふのまのちもあつた







[illegible][illegible]



下

玉依娘

新

乃保親王

釋教

松透

心くはるに何れも浮きあがり  
母院

三十二相のくも

三十路二元を並てりひの人のあつたに  
光明堂辰

くの志か

後拾 九果のりく

今

月  
あまのこゝろと唱ふるあまを構ふや若菜の心漕み  
人 浮後

人々の声

何れなる人ともぬれざるを  
 人ともぬれざるを哀なれり我に  
 漢金

その時

予我 汝勤の毎三季のあらうとぞ

三  
世の御

三世の法華入りと照一の書  
ある香ヶ谷のとりそとほひども三よの仰の恩然院  
宗徳院

法の

新勅  
法の月名もあとも小判をさうりえに  
大佐  
切基

莊

七















法のゆがさ

日 今も昔も白ひを結ぶ法のゆがさ 飛氏

法の舟人

日 舟人なる法の舟人の舟人なりとも我々舟人 慶運

法乃衣

日 鹿野堂の法乃衣 鹿野堂

法のとほそ

日 法のとほそは法の衣なりともやうに法なりとも 法乃衣

法の川長

日 法の川長は法の川長なりとも法なりとも 法乃衣

法乃衣

日 法乃衣は法の衣なりとも法なりとも 法乃衣

法のとほそ

日 法のとほそは法の衣なりとも法なりとも 法乃衣

法乃衣

日 法乃衣は法の衣なりとも法なりとも 法乃衣

法のとほそ

日 法のとほそは法の衣なりとも法なりとも 法乃衣

法乃衣

日 法乃衣は法の衣なりとも法なりとも 法乃衣

法のとほそ

日 法のとほそは法の衣なりとも法なりとも 法乃衣

法乃衣

日 法乃衣は法の衣なりとも法なりとも 法乃衣

法のとほそ

日 法のとほそは法の衣なりとも法なりとも 法乃衣

法乃衣

日 法乃衣は法の衣なりとも法なりとも 法乃衣

法のとほそ

日 法のとほそは法の衣なりとも法なりとも 法乃衣

法乃衣

日 法乃衣は法の衣なりとも法なりとも 法乃衣

法のとほそ

日 法のとほそは法の衣なりとも法なりとも 法乃衣

法乃衣

日 法乃衣は法の衣なりとも法なりとも 法乃衣

法のとほそ

日 法のとほそは法の衣なりとも法なりとも 法乃衣

法乃衣

日 法乃衣は法の衣なりとも法なりとも 法乃衣

法のとほそ

日 法のとほそは法の衣なりとも法なりとも 法乃衣

法乃衣

日 法乃衣は法の衣なりとも法なりとも 法乃衣















[illegible][illegible]



三

後撰

張子

凡  
史歌

張

張俊子

五

拾遺記

實方  
授中

卷之六

大支德威

大支德威

吉田即右衛門

元祿九丙子歲初冬吉日

下村長右衛門



奇社説

奇社祇説

慶賀

誤後説

張

凡

お

と

の誤入をさすも邪のありや我々の為  
松も如くともなきて十よりおれぬ  
や松平よりいふと云ふ人の  
とんどもん

拾古所定

真本

拾古所定

真本

大徳成

Intara





